

第3部会

的キリスト者」のキリスト教を「ゆがめられたナシヨナリズム」によるものとして批判する。すなわち、それはドイツの民衆的（フェルキッシュ）な要素をくみ取っておらず、真のナシヨナリズムとは言えない。そしてハイラーは、政治的なナシヨナリズムに対して、キリスト教的なナシヨナリズムの必要性を説く。真のナシヨナリズムは、政治的な権力への意志によって成立するのではなく、「神に満たされた魂」であり、それは民族を分断するのではなく結びつけるものとされる。

ヴァイマル期の宗教思想を大きく捉えていった場合、キリスト教教会の内・外という区別を立てるとすれば、ハイラーの宗教思想やそれに基づく運動はその「間」で展開されていた。カトリック出自でありながら、当時のカトリック教会の近代主義的方針に反発し、教会制度を脱しつつも、そこから完全に離れた脱キリスト教的な宗教運動を展開するには至らず、むしろその外部からエキュメニカルな活動を展開していった。そしてその思想はナシヨナリズムを肯定しつつも、より普遍的な理念を掲げて活動を展開していた故に、当時の国家社会主義的な流れに飲み込まれることはなく、ゆえにその運動は戦後へと引き継がれた。今回の発表では触れることができなかったが、戦後ハイラーの宗教思想・運動はキリスト教諸教派の協同から、さらに諸宗教の協同、さらには合一を目指すものへと展開していくのである。

テイリツヒの「究極的関心」と真理

澤井治郎

二〇世紀初頭、ドイツで神学者としてのキャリアを積んでいたテイリツヒにとって、アメリカは哲学的にも神学的にも後進国であった。一九三三年、その後進国への亡命を余儀なくされた彼は、当初、もはや神学的・哲学的仕事は出来ないかもしれないという思いにかられ、憂鬱になっていた。しかし、そのアメリカで彼は自身の神学の集大成である『組織神学』（全三巻）を書き上げ、また「究極的関心」という現代の宗教学において、もよく知られている宗教概念を構築した。アメリカにおいて、テイリツヒは名声の絶頂を迎えたといえる。それでは彼は、アメリカに何を見出し、それは自身の思想展開にたいして如何に作用したのか。それは、当時のアメリカにおける宗教思想の理解にもつながる問題である。

そうした事柄を考察するために、まずテイリツヒのドイツ時代の後半（前期Ⅱ）と、アメリカ時代の前半（中期）の宗教論をそれぞれ概観し、両者を比較検討することによって、前者から後者への思想展開を探究する。特に、テイリツヒの宗教論および宗教的象徴論における「真理」の概念に注目する。というのも、後期の体系構想期には、彼の宗教論にとって象徴はますます重要度を増して、宗教を表現するために必須のものとされ、そこではほぼ必ず象徴の真理性ということが問題となるか

らである。

それら二つの時期の宗教論を比較検討すれば、その基本的枠組は一貫していることがわかる。それは次のような点である。すなわち、ティリッヒの宗教論が、「無制約的なもの」や「究極的なもの」を中心に据えて、いわゆる「宗教的領域」に限定されない広い範囲に宗教的なものを見出そうとする点、個別的な宗教的表現を宗教的象徴として解釈するという点、さらにその宗教的象徴の「真理性」を「無制約的なもの」あるいは「究極的なもの」を真に表しているかどうかによって規定し、動的に捉える点である。

しかし、より細かく見るとそこにはティリッヒの視点の変化を見て取ることができる。それが、本質／現実の緊張関係という見方から、広義／狭義の二重性という宗教の理解へと展開している。この変化は、「究極的関心」という広義の宗教理解の範囲内においてではあるが、宗教の多元性を包括するような方向へと展開しており、広義においては「究極的関心」として広く宗教の意味を人間の実存に関わる問題として解釈し、狭義においては具体的で個別的な宗教を人間の実存的関心が表現された象徴として、それらの意味を再解釈しようという意図が確認できる。

こうした宗教論の変遷の問題は、ティリッヒの真理観の展開に収斂するように思われる。その真理観の展開に大きく関わるのがプラグマティズムにおける「真理」である。アメリカ亡命後のティリッヒは、究極的に関わることによって経験される実存的な「動的真理」、すなわち「実存的真理」という概念によ

って自身の宗教概念を根拠付けている。そうした真理観はプラグマティズムの動的真理という考え方と類似しており、ティリッヒ自身もその関連性を指摘している。そうした真理観が亡命後に宗教論に取り入れられ、それと対を為す形で「究極的関心」の概念が現れていることから、彼の思想とプラグマティズムの関わりは、今後さらなる検討を要する問題である。

テキスト科学とインド哲学研究の方法論について

三 浦 宏 文

インド哲学は、これまでインドの伝統的方法、文献学的研究、思想史的研究、哲学的研究といったいくつかの方法論によって研究されてきた。しかし、その方法論自体については一部を除いてあまり議論されてこなかった。日本においても、インド哲学の研究方法といえば、仏教学とともにサンスクリット語などの外国語文献を正確に読解して行くという「客観的文献学」のイメージが強く、その「客観的文献学」を下地としてどのような研究をするか、という意味での方法論はほとんど考えられてこなかった。

このような状況に対して、名古屋大学の和田壽弘を中心とする研究グループは、最近の著書で「テキスト科学」という新しい方法論を提案した（和田壽弘編『インド哲学における伝統と創造の相克——テキストとコンテキスト』統合テキスト科学の